

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370286

研究課題名(和文) 18 - 20世紀の旅行記によるネットワークの形成とジャンル間の相互影響に関する研究

研究課題名(英文) The Formation of Literary Network Found among the Travel Writings and the Mutual Influences between Different Genres from the 18th through the 20th Centuries

研究代表者

天野 みゆき (AMANO, Miyuki)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50258282

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：18 - 20世紀の旅行記について、作家や作品間のネットワークの形成と、他のジャンル(特に小説)との相互影響を中心に研究を行い、次のような点を明らかにした。

1) チャールズ・ディケンズの旅行記とマーク・トウェインの短編小説との関係性、2) シャーロット・ブロンテの小説における旅のテーマの重要性、3) エリザベス・ビショップの詩と短編小説の関係性、4) 感情をめぐる時代のネットワークに対するジェイン・オースティンの関わり方、5) ジョージ・エリオットの詩における旅のテーマの重要性、および彼女の詩とハリエット・マーティノウの旅行記、シャーロット・ブロンテのエッセイとの関係性。

研究成果の概要(英文)：This study has attempted to examine the formation of literary networks found among British and American writers and their works, looking at the mutual influences between different genres, and providing an explication of the following points regarding travel writings from the 18th through the 20th centuries: 1) the relationship between Charles Dickens's travel book and Mark Twain's short story; 2) the significance of travel motif in Charlotte Bronte's novels; 3) the relationship between Elizabeth Bishop's poems and her short story; 4) the importance of travel motif in George Eliot's poems, and the relationship of her poems to Harriet Martineau's travelogue and Charlotte Bronte's essay.

研究分野：人文学

キーワード：旅行記 チャールズ・ディケンズ マーク・トウェイン シャーロット・ブロンテ ジェイン・オースティン ジョージ・エリオット

1. 研究開始当初の背景

(1) 旅行は階級やジェンダー、人種、国家によって特徴づけられるゆえに、旅行記はこれらの問題を考える際の重要な資料である。

(2) 近年、人文科学の分野において旅行記研究の重要性が認識され、学際的な研究が活発に行われるようになった。

2. 研究の目的

(1) 18世紀から20世紀にかけての旅行記の時代的特徴と歴史的变化に注目し、それらがどのようなネットワーク(作家同士の、また作品間のネットワーク)(価値観の衝突と新たな価値観の創造の場)を形成しているかを明らかにする。

(2) 旅行記・旅文学という多様性・混淆性を特徴とするジャンルが、他のジャンル、特に小説とどのような相互影響を生み出しているかについて研究する。

3. 研究の方法

(1) 主たる研究対象は、旅行記と小説(あるいは詩)の両方を著したイギリス人とアメリカ人作家とする。

(2) 歴史的变化を考察する手段として同じ国、同じ場所を訪れた際の記述に注目する。

4. 研究成果

(1) イギリスの作家チャールズ・ディケンズ(1812 - 70)の旅行記『アメリカ紀行』と、アメリカの作家マーク・トウェイン(1835 - 1910)の短編小説「ナイアガラの日」との関係性を明らかにした。これまで論じられることが少なかった二つの作品を通して、両作家の重要な関係性と、そこに潜む問題の複雑さを浮き彫りにすることができた。

拙論のタイトルと概要を次に記す。

拙論「風景の創出 ナイアガラ、インディアン、移民をめぐる」(2015年)

北アメリカ最大のランドマークとして人々を魅了し続けてきたナイアガラは、その歴史を見れば、先住民とヨーロッパ人入植者との衝突・相互依存の象徴と言える。

ナイアガラでは1820年代に入植が進み、産業の発展と旅行者の増加により風景も急激に変化してゆく。1830年代半ば以降、鉄道網の発達により、駅や橋などが新しく風景に加わり、1840年代半ばまでには、国境地方に約10万人、ナイアガラに約4万人が居住していた。南北戦争が終結した1865年以降、再び加速度的に鉄道網が拡大して観光産業が発展した。ディケンズが訪れたのは1842年、トウェインが「ナイアガラの日」を発表したのは1869年である。

本稿では、先行テキストが蓄積してきたナイアガラの表象に、ディケンズとトウェインがどのように反応し、自らのナイアガラを描き出したのか、インディアンと移民の問題をいかに提示しているかに焦点をあてた。

崇高とピクチャレスク概念に親しんだヨーロッパからの旅行者たちは、これらの美的規範を用いて彼らに先立つ旅行者や探検家たちが記述したナイアガラの風景を求めてやってきた。そして自らの体験を記録した。ディケンズも例外ではない。『アメリカ紀行』において、ナイアガラの滝に対峙するとき、ディケンズは崇高な自然の中に平安を見出し、ワーズワース的な反応を示している。

ディケンズのナイアガラ表象について注目すべきは、風景が人間の存在と結びついたとき、風景は彼にとって重要な意味を持つことだ。ナイアガラの滝の場面は、彼がアメリカに来る前に強い関心を抱いていたインディアンとの連想も生み出している。

だが、ディケンズが、インディアンに魅了されながらも越えられないと感じていた「深淵」は、後に決定的なものになる。ディケンズの「野蛮人」に対する態度の変化という点から見ると、ナイアガラとインディアンの連想は皮肉な様相を帯びてくる。彼にとって、インディアンはその個別性を失い、より大きな集団・概念の一部にすぎなくなってしまうのである。ディケンズは、先住民族に対して興味と嫌悪が交錯する想いを抱き続け、そこに潜む問題に対する洞察を深めていった。この点はトウェインも同じだったと言える。

トウェインの短篇「ナイアガラの日」は彼が得意とする法螺話の形式で、ナイアガラの観光地化と「ナイアガラの崇高」を求めて群がる人々を風刺している。

この作品の二つのヴァージョンを比較すると、書き換えの過程において、トウェインが風景のとらえかたと、「高貴なアメリカ・インディアン」のエピソードに重きを置いたことがわかる。語り手のインディアンへの攻撃とインディアンの暴力性は、おそらく白人であろう検視官の冷酷さによって、さらには、インディアンが実はアイルランド人だという結末によって、効力を失う。検視官の冷酷さは、ディケンズの『アメリカ紀行』の中の言葉、「慣習・習慣は人をどんなことにも慣れさせる」(第10章)を思い起こさせる。この短編は単なるインディアンへの攻撃には終わらず、むしろインディアンをめぐる複雑な問題を示しているのである。

トウェインは、まるで一種のオブセッションのようにインディアンの残虐性や劣等性とともに、インディアンの伝説を作品の中に描き続けていく。そこには、インディアンに対する好奇心と、嫌悪、差別意識、罪の意識が交錯する。『赤道に沿って』(1897)に至ると、トウェインのインディアンに対する変化を見ることができ、彼はディケンズと同様、人間の感覚を麻痺させて「犯罪」を「美德」

にすらしてしまう「慣習」の恐ろしさを告発している。

二人の作家がナイアガラ体験を通して描き出したのは、歴史と社会に関わる問題提起とともに、彼ら自身の興味や嫌悪、葛藤が複雑に交錯する風景なのである。空間的にも心理的にもインディアンと距離をおくことのできたディケンズに比べ、トウエインにとってインディアンは切り離そうとしても切り離せない存在であり、自らのアイデンティティに関わる問題であった。

(2) シャーロット・ブロンテ (1816 - 55) の小説における旅のテーマの重要性を明らかにした。

拙論「Ambition の追求 『教授』における旅」(2015年)(図書 に掲載)

『教授』(1857) は、シャーロット・ブロンテ自身のブリュッセル留学体験を色濃く映し出しつつ、異なる形とレベルの旅を描いた作品である。旅をテーマとする点で、旅行記のジャンルに属するとも言える。

15世紀から20世紀に至るまで、旅行記というジャンルはヨーロッパの帝国主義的拡大に重要な役割を果たしただけでなく、旅行者の国外での活動やヨーロッパの拡張主義を推し進めたイデオロギーも示している(Thompson 3)。18世紀後半から19世紀初めにかけて、アン・ラドクリフ、ウォルター・スコット、メアリ・シェリーらロマン派作家たちが旅の経験を作品に織り込んだことで、旅と小説は緊密な関係を持つようになった(Dekker 3, 22-24)。本稿では、『教授』の三人の登場人物、フランシス・アンリ、ヨーク・ハンズデン、ウィリアム・クリムズワースがいかなる野心(ambition)の実現を目指したのかという観点から、彼らの旅の意味と関連性を考察した。そこには、作者シャーロットの個人的な体験を超える展望も読み取れる。

フランシスの野心は、まず、自立し、自分の活動の場を広げていくことであり、具体的にはイギリスに行きフランス語の教師になることだった。それに、クリムズワースの愛を獲得するという野心が加わった。彼の愛を得てからは、フランシスの旅は、クリムズワースと共に活動することで自らの弱点を克服し、大望を実現する旅だと言える。

しかし、彼女の旅は個人的な自己実現の旅にとどまらない。彼女の出自、作文、ハンズデンとの議論などを通して、絶えず歴史・民族・宗教的連想を引き起こしつつ問題を提起するのである。

フランシスはスイス人牧師の父とイギリス人の母を持つ混血であり、この設定により、スイスとベルギーの歴史が積極的に利用されている。スイスもベルギーも周辺諸国や支配国の文化の影響を強く受けた多言語多文化社会である。フランシスは言語と文化の軋

轢・混交を象徴する存在だとも言えよう。

イギリスに憧れを抱き、実際に行き確かめたいと言うフランシスに、クリムズワースは教師として行ってもごく限られた経験しかできず、国について知ることはできないと言うが、彼女は「人は類推(analogy)によって学ぶことができる」、「サンプルでも、よく全体を理解するのに役立つ」(120)と反論する。登場人物たちの経験を通して、私たち読者も「類推」で学ぶことを期待されている。

ハンズデンは、社会的慣習・階級を自ら越えたいという野心を持つが、果たせず、愛する女性との結婚を断念する。だからこそ、彼は他者の人生に干渉し、人を動かすことで自分には成しえない野望を実現させようとするのだ。その可能性を見極めるためにイギリス国内はもちろん様々な国の動向に注意を払い、外国の人々とも幅広く交際する。彼の旅は、シニカルでありながら人間への期待を捨てきれず、他者を通して人間の可能性を探る旅と言える。彼の旅はクリムズワースとフランシスの旅と交差し、彼らの価値観に揺さぶりをかけ、展望を広げる触媒となる。

クリムズワースのブリュッセルへの旅立ちには、イギリスの物質・金銭第一主義による抑圧からの逃避であり、職を得ることは義務であった。彼が初めて意志的に目指したのは、フランシスとの結婚である。ただし、彼女と結婚する資格があると考えていた彼は、それを「野心」ではなく「目的」ととらえた。結婚後は、フランシスと同じ道を行っていると彼は信じているが、二人の間には意識のずれが生じ始めている。クリムズワースは支配者になり得る資質をもち、しかも若き日の鋭い感受性を失っている。彼自身が親子三人の将来に暗雲をもたらす存在になっているのだ。

「野心」をめぐる三人の旅はそれぞれの自己実現あるいは問題追求の旅であるにとどまらない。シャーロット自身の関心に基く歴史・民族・宗教的連想により、個人の体験と民族や国家の体験とを重ね合わせ、当時のイギリスやヨーロッパの動向にも結びつけて、様々な問題を提起している。貴族階級に近いブルジョワの地位を獲得し安泰と思われるクリムズワース夫妻の物語さえも問題をはらみ、単純に帝国主義を支持するものとは言えない。読者がそれぞれの「連想」と「類推」によって作者の個人的な体験を超える展望を得ることを促すという点で、小説と旅行記が接近した興味深いテキストである。

拙論「『シャーリー』におけるローズ・ヨークの役割」(2016年)(図書 に掲載)

シャーロット・ブロンテの『シャーリー』(1849)に登場するローズ・ヨークは12歳の少女である。初めてキャロライン・ヘルストンに会ったとき、旅への憧れと欲求、自分自身の人生を生きる決意と覚悟を語る。作品中、ローズが登場する場面はわずかだが、彼女は

すべての登場人物、さらには読者に関わる重要な問題を投げかける。本稿では、ローズが担う役割を考察し、『シャーリー』の意義を明らかにした。

ローズの父親はイギリスのヨークシャーの名家出身で、急進的かつ傲慢な資本家である。母親は、時代を支配するイデオロギー（男性には公的領域、女性には私的領域を割り当てたイデオロギー）を内面化した女性であり、娘を家庭での義務に忠実な女性に育てるべきだと信じている。このような両親のもとで、ローズは抑圧される苦しみを味わいながら、生きることを考える。

ローズの願いは、まず自らの活動領域、境界を広げ、持てる能力を最大限に生かすことである。これらは同時に、他の登場人物や読者への問かけであり、さらに、ローズは小説や聖書について自身の考えを示すことで、テキストをいかに読み、解釈するかという問題も提起する。

このようなローズとの比較により、他の登場人物たちの生き方、とりわけ、二人の女性キャロラインとシャーリー・キルダールの生き方が浮き彫りになる。キャロラインは、知的向上心を持ち、動植物に対する関心を共有することで労働者との間に存在する階級の境界線を越える。だが、人生の希望のすべてをロバート・ムアにかけているゆえに、ローズのように積極的に未知の領域を目指す意志を持つことはできない。

シャーリーは、地主という地位と財産と己の能力を生かし、強い意志と実行力で社会的な貢献を試みる。労働者たちの暴動を防ぐために救済基金の設立という「公共的計画」に着手する。彼女は自分より社会的には身分の低い男性ルイ・ムーアを愛する。常に逆転の可能性をはらむ関係において、シャーリーとルイは相互に影響力を行使することで緊張感と刺激を持続させ、安らぎや助けも得ながら自己の能力を高め、責任を果たしていくことを望んだのだ。

キャロラインもシャーリーも、女性が結婚後に自立性を保つことは不可能だと考えていた。それでも二人は結婚を選んだのだ。敬意と信頼に基づく愛ゆえに従属し、自分を見失う危険性の原因が己の内に存在することを自覚しながら、なお結婚を願わずにはいられない女性が直面する困難を、シャーロット・ブロンテはあえて詳述しないことで強調している。愛する女性の感化力に助けられて心理的、社会的境界を越え、さらには時代の趨勢と結婚により、社会的成功と権力を手に入れた二人の男性と、その横に立つ幸せそうな二人の妻。この構図の中で、シャーリーの鋭い視線は、彼女の日々が単なる服従ではないことを暗示する。服従に見える行為のなかに潜む抵抗のありようを、私たちはすでにローズの中に見ている。書かれた物語から、書かれなかった物語を読みとることを読者は期待されている。

シャーリーとキャロラインの選択と対極にあるのが、ローズとジェシー姉妹の選択である。異国の地で、ジェシーはローズに守られ多くの困難を乗り越えた後に、幸せな死を迎え、その2年後にローズはさらに遠い南半球の国に一人移住した。ローズは最後まで意志を貫いたのだ。いずれの生き方を選んでも闘いは続く。ローズの生き方とシャーリーの願いが抱える問題を、ブロンテは『ヴィレット』(1853)においてより深く追究し、ルーシー・スノウを通して女性が自己実現と愛の獲得の両方を成し得る可能性を示す。その前段階として、『シャーリー』ではローズによって生き方と読み方の問題を提起し、それを性別や階級を越えて人々が共有するものとして探究したと言える。

(3) アメリカの詩人、エリザベス・ビショップ(1911 - 79)の詩と短編小説の関係性を探り、国際学会で発表した(2015年)

ビショップは幼少期の体験に基づく短編小説「村にて」を彼女の代表作である詩集『旅の問い』(1965)の中心に置いている。なぜ、そこに短編を置いたのかという問題は、これまでほとんど取り上げられてこなかった。

この問題について、テーマ(母娘関係、家と旅、日常生活における悲劇)と技法(色と音による象徴)の点から、他の詩との関連性を視野に入れつつ論じた。

(4) 感情をめぐる時代のネットワークに対するジェイン・オースティン(1775-1817)の関わり方を明らかにした。

拙論「ジェイン・オースティンの語りの技法 『説得』における感情表現、身体性と演劇性」(2017年)

18世紀後半から19世紀にかけて、感情の源と質を探ることへの関心が高まり、読書と感情の関係性も重要な考察対象となった。このような状況が形成するネットワークにおいて、ジェイン・オースティンは小説『説得』(1817年)でヒロインのアン・エリオットの感情に焦点を当て、感情が持ち得る力をテーマの一つにしている。オースティンが登場人物の感情表現と、語り手による読者の感情操作という二つのレベルにおいて、いかに身体性と演劇性を巧みに用いているかを明らかにするとともに、感情のありようをどのように問題化し、当時の感情をめぐる議論に関わっているかについて考察した。

『説得』は、感情が持つ両義性、男女をめぐる感情の持続性はジェンダーに関わる問題であること、感情についての議論は証明不可能であることを示す。感情をめぐる議論において物語は一つの例ではあっても証拠とすべきではない、このような立場をとりながら、オースティンは読者がどこに自分の着地

点を見出すのかを問いかけている。

(5) ジョージ・エリオット (1819-80) の詩における旅のテーマの重要性、および彼女の詩と同時代の作家ハリエット・マーティノウおよびシャーロット・ブロンテの作品との関係性を明らかにした。

拙論「詩と旅と信仰 “Agatha” における George Eliot の試み」(2015年)

ジョージ・エリオットが旅の中でインスピレーションを得てそれを作品に昇華させたことは、よく知られている。「アガサ」もその一つであり、1868年5月から7月にかけてルイスとともにドイツとスイスを旅したときに得た着想をもとに1869年1月に完成させた詩である。

近年、エリオットの詩の再評価が急速に進んでいるが、多くの詩はより詳細な研究を必要としており、「アガサ」も例外ではない。本稿では、「アガサ」について、まず、エリオットの旅での経験を確認したうえで、聖母マリアとの類似性を強調しながらアガサの「人生という旅」を描き出す技法を考察し、この詩が言わば両者を賛美する聖歌(アンティフォナ)になっていることを明らかにした。さらに、この詩とエリオットの他の詩との関連性についても考察した。

アガサは、貧しいが敬虔なカトリック教徒である。かつて世話をした夫婦から譲り受けた小さな家に、心身共に弱い二人の従姉妹と暮らし、村人たちが与えてくれる繕い仕事などで日々の糧を得ている。常に隣人への感謝の念を抱き、神に祈ること、他の人々のために祈ることを忘れない。村人たちの代理として、二度目の巡礼の旅に出ようとしている。

このようなアガサが聖母マリアと重ね合わされ、まさに聖母のような人間として描写される。エリオットは、マリア崇敬をはじめとするカトリックの慣習や巡礼、絵や象徴(イメージ)、音楽的要素を巧みに用いて、読者の視覚と聴覚に訴えながら、聖母マリアとアガサに共通する精神の崇高性だけでなく、聖母マリアとアガサの「人生という旅」を重ねつつ、そこにアガサと村人たちの信仰のありようを描き出すのだ。このような技法の中で特に次の三点、1)村人たちの聖母マリアとアガサに対するまなざし、2)「とりなし」という役割 3)「アンティフォナ」に注目した。

村人たちの「愛するもののすべてを小さきものに変える」慈しみのまなざしは、愛情の対象に限界を強いたり貶めたりする可能性をはらむが、アガサをからかおうとする若者たちは実際には彼女にやさしく、アガサも彼らの真意を理解している。貧しく老いたアガサは受動的な弱き存在ではなく、「とりなし」の役割を認められている。共同体の中で、信仰が人々の絆を強め、各自が己の務めを果た

すことで人間関係のバランスを保ち、互いに思いやり助け合う関係を築いているのである。

アガサとの連想を呼ぶ聖母マリアは、非常に人間的な、慈愛に満ちた母として描かれており、聖母の表象の歴史から見ると、13世紀以降に発達したイメージである。マリア崇敬が頂点に達した12世紀にマリアは「神の母」としての高い地位を得たが、その頃イタリアに生まれた神秘主義思想の影響により、13世紀以降、「神の母の威厳に輝くよりも、人間の母にふさわしい優しさをたたえたイメージ」へと変化した(石井、37)。このようにマリア崇敬と神秘主義思想がもたらした聖母マリアのイメージと信仰の実践を、アガサと村人たちは守り続けているのだ。

「アガサ」は、詩全体を通してアガサと聖母マリアの類似性を喚起しつつ、「受胎告知」を連想させるアガサとリンダ伯爵夫人との「交唱」(antiphony)を核とし、音楽的要素を巧みに用いてアガサと聖母マリア両者を称える聖歌(アンティフォナ)を成している。「見えざる聖歌隊に加わらせ給え」(1867年作)でエリオットが歌い上げる永遠の生命をアガサが獲得するであろうこと 死後も生きている者たちに道徳的影響を与え、彼らの記憶の中で生き続けること を予言するアンティフォナである。

「アガサ」は、死のテーマによってエリオットの「モーセの死」とつながり、アガサの語られぬ過去と罪というテーマによって「自己と人生」(1874-78年作)と関連性がある。

拙論“Unique Representations of Moses in the Works of Harriet Martineau, Charlotte Brontë and George Eliot” (ハリエット・マーティノウ、シャーロット・ブロンテ、ジョージ・エリオットの作品における独自のモーセ表象)(2017年掲載予定)

エリオットの詩「モーセの死」(1873-76年作)を、同時代作家、ハリエット・マーティノウ旅行記『東方の生活 現在と過去』(1848)およびシャーロット・ブロンテがブリュッセル留学中にフランス語で書いたエッセイ「モーセの死」(1843)と比較することで、三人の作家の特徴を論じた。また、エリオットのこの詩と他の詩、および小説との関連性を考察することで、この詩がユダヤの聖書注解書ミドラシュを書き換えたものとして興味深いだけでなく、20世紀の作家、ヴァージニア・ウルフとの関連性があることを明らかにした。

以上のような研究成果を得て、旅行記と小説が共有する関心とともに、小説の方が複雑な問題提起を行っている場合が多いことも明らかになり、ジャンル間の越境に注目して両者についての研究を深める意義を見出した。この成果を基盤としてさらに研究を進展

させるために、平成 29 年 4 月より新たな研究「19 世紀から 20 世紀に至る英米作家の文学の交流における多様な『越境』に関する研究」(基盤研究 (C) 課題番号 17K02511)を開始している。

<引用文献>

Dekker, *The Fictions of Romantic Tourism: Radcliff, Scott, and Mary Shelley*. Stanford: Stanford UP, 2005.

Thompson, Carl. *Travel Writing. The New Critical Idiom*. London: Routledge, 2011.

石井美樹子『聖母のルネサンス マリアはどう描かれたか』岩波書店、2004 年。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

天野みゆき「風景の創出 ナイアガラ、インディアン、移民をめぐる」『マーク・トウェイン 研究と批評』日本マーク・トウェイン協会編 南雲堂 2015 年、57-65 頁、招待

Amano, Miyuki. “Recent George Eliot – George Henry Lewes Studies in Japan. *George Eliot – George Henry Lewes Studies* (The Pennsylvania State UP) 67.1 (2015): 43-55 招待

天野みゆき 「詩と旅と信仰 “Agatha” における George Eliot の試み」『ジョージ・エリオット研究』日本ジョージ・エリオット協会編、17 巻、2015 年、29-44 頁、査読有

天野みゆき 「『説得』における感情表現、身体性と演劇性」『英語英文学研究』広島大学英文学会、第 61 巻、2017 年、43-54 頁、査読有

Amano, Miyuki. “Unique Representations of Moses in the Works of Harriet Martineau, Charlotte Brontë and George Eliot.” *George Eliot – George Henry Lewes Studies* (The Pennsylvania State UP) 第 69 巻に掲載予定、2017 年、査読有

[学会発表](計 4 件)

天野みゆき「風景の創出 ナイアガラ、インディアン、移民をめぐる」ディケンス・フェロウシップ日本支部、日本マ

ーク・トウェイン協会合同大会シンポジウム、2014 年 6 月 21 日、於明治大学

天野みゆき 「詩と旅と信仰 “Agatha” におけるエリオットの試み」日本ジョージ・エリオット協会第 18 回全国大会シンポジウム、2014 年 11 月 29 日、於京都大学

Amano, Miyuki. “An Exploration of the Short Story, “In the Village,” as the Heart of Elizabeth Bishop’s *Questions of Travel*.” Elizabeth Bishop’s *Questions of Travel: Fifty Years After*. 2015 年 6 月 25-27 日、Halifax Hall, University of Sheffield, UK.

天野みゆき 「ジェイン・オースティンの語りの技法 『説得』における身体性と演劇性」日本英文学会中国四国支部第 68 回大会シンポジウム「イギリス文学と感情の修辞学」 2015 年 10 月 23 日、於修道大学

[図書](計 3 件)

Amano, Miyuki. “Natsume Sōseki, Mother and Gender.” Eds. Lisa Raith, Jenny Jones and Marie Porter. *Mothers at Margin: Stories of Challenge, Resistance and Love*. Cambridge Scholars Publishing. 2015. pp. 33-47. 査読有

天野みゆき 「Ambition の追求 『教授』における旅」『ブロンテと 19 世紀イギリス 日本ブロンテ協会創立 30 周年記念論集』日本ブロンテ協会編、大阪教育図書、2015 年、63-73 頁、査読有

天野みゆき 「『シャーリー』におけるローズ・ヨークの役割」『内田能嗣教授傘寿記念論文集 文藝礼讃 アイデアとロゴス』内田能嗣教授傘寿記念論文集刊行委員会編、大阪教育図書、2016 年、193-202 頁、査読有

[その他]

ホームページ等

<http://pu-hiroshima.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天野 みゆき (AMANO, Miyuki)
県立広島大学・人間文化学部・教授
研究者番号：50258282